しんらん同人

No,545
7・8 月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺
〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8
【電話】03-3950-7828 【ホームページ】http://www.seiganji-tokyo.jp/

6月17日
なかよしクラブ
※ 編集後記参照

われも ひかりの うちにあり

誓願寺住職　古賀尚之

最近のテレビ番組における、素人探偵まがいの内容や、芸能タレントコメンテイターの発言には行き過ぎと思うことが多々あります。また、問題解決の道が論じられていません。

某大学のアメフト問題。レスリングパワハラ問題。資産家の死亡事件。極めつけは政府を忖度した官僚によるモリカケ問題。

一緒に論じるのはどうかとも思うのですが、週刊誌ネタの報道を懲りずに発信している事と、更に拍車をかけるようなような関係者の対応やお詫びにげんなりしています。

一方、人はおごり高ぶりから間違いを起こします。しかし、一度の間違いでその人の人生を断罪してしまうのはいかがでしょうか。

当事者が自分の間違いに真摯に向き合い反省すれば、そこまでの地位を築いた方であれば、更なる人生を進むことが出来るのではないでしょうか。

自分の誤りを指摘されることは、自分が正しいと思って歩んできた生き方を更に幅広く強くする糧です。そこから逃げては、自己の進歩の道を閉ざすことになります。

阿弥陀如来のお慈悲の心は、私たちに「自分ひとりで生きているのではない。気付けよ、目覚めよ、自分を知れよ。」と、呼びかけられています。

自分ひとりで生きているのではなく、生かされてきた命であることに気付かされ、感謝の気持ちで豊かな人生を送りたいものです。

しんらん同人より

誓願寺前住職

故 岡本泰仁

死を迎える準備

死を迎える準備は「今」すべきです。確かなのは「今」であり、「生まれた」ことは「死ぬ」ことで、それが今日であるか、十年後であるか、誰もわかりません。

私どもは過去に執着し、未来を夢見て生きていますが、確かなのは今であり「ここ」だけであります。

蓮如上人は「御一代聞書」の中で「仏法には明日ということあるまじき由の仰せに候」といわれております。

つまり、今ここに生きる私そのものが問題であり、次の瞬間はもう保障されていないのです。

健康体の者も、癌を告知された者も、今ここで自らの死を自覚し得る存在であるか否かが一番重要なことなのです。

健康な人は死の問題をはるかかなたに置き、自分の問題として問いません。

ところが癌等の病魔に襲われると、死が現実の問題となってきます。

自分を支えてくれる何ものも存在しなくなります。

長い間培ってきた教養も知識も財産も名誉も家庭もすべて当てに出来ません。

自分の死に同情はしてくれても、代わってくれる者はいません。

ただ一人この世を去っていく。全く孤独です。

死の自覚の前には、不安と絶望と孤独が残されるのみです。

しかも次に譲ることのでき得ない、厳しさを持つ問いです。

この問いに答えられるのが親鸞聖人の教えです。

先年、肺がんで亡くなった私の父（岡本泰雄）は、もう最後かもしれないと言いつつ、死ぬ三か月前に次のような法話をしました。

『本堂でお勤めをしながら、何となく胸が詰まって参って、自分ながらおかしいなと何べんも言い聞かせながら、どうしようもない気持ちです。

何故こういうふうに悲しまずにはおれないのかということを考えて観たところ、自分が死んでいくということ、それが悲しいんだということではないようです。

本当に自分はどうなるかということは、今までお聞かせいただいているように、間違いなくお浄土に参らせていただく。

私の値打ちで参るのではなく、如来さまの一人働きで、私のようなものもお浄土に参らせていただくんだと。

その点は有り難いことに安心させていただいているんですが、今まで四十年・五十年と親しく付き合って下さって、私のことを色々ご心配下さった皆様方とお別れするということが辛いというか、悲しいというか、それでついこういう情けない姿になってしまうのだなあと思います。

しかしながら、この人生は無常の世界であって、いつまでも共に生きるということは出来ません。

いつか必ず皆様とさよならしていかなければならないのです。

それが今、私の身にかかろうとしているのです。

阿弥陀経の中に「俱会一処」という言葉があります。

共に一つの処に会う。一つのところというのはお浄土です。お浄土でみんな一緒にさせていただくんだということでありましょう。

なるほど私の父も母も兄弟たちも、あるいは知り合いの沢山の人たちも、もう逝かれた人が本当に多いですね。

みんなお浄土に参られて、向こうの方がこちらの生活よりも賑やかになっているのじゃないかなあ、というような気も致します。

父も母も待っていてくれるだろう、こう考え直してみますと、ただお念仏よりほかにないのです。

「ただ念仏して、弥陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずる」よりほかにないのであります』と。

一日一日は死に向かっていても、命終わった時、仏と生まれ変わらせていただくのです。

今、浄土への道を歩ませていただいているのです。

浄土往生の道は、私たちが求める前に先行して、仏からすでに与えられています。

ただ私の側から拒絶しているだけです。丁度引っぱるとすぐ開くドアを一生懸命押しているようなものです。

先行して既に与えられている南無阿弥陀仏を素直にいただくだけです。

死を迎える心の準備はここにあります。

「法味抄」より

浄土に生まれるには五つの大切なことがある。それは宿善・善知識・光明・信心・名号である。

（文二～十一）

極楽は楽しめる所だから、極楽に参りたいと願う者は佛とはならない。弥陀を信ずる者ばかりが佛となるのである。

（聞書）

人生生活は五欲（食欲・性欲・睡眠欲・名誉欲・財欲）の連続である。たとえ清浄な心を起こしても、それは水に描いたもののようなもので、またたく間に消え失せてしまう。

（序分義）

「法味抄」は、故岡本泰雄が「聖語を読みたいと思っても、漢文や古文で書かれているのでなかなか理解しにくい。わかりやすい仏教書がほしい。」という方々の願いに応じて、真宗聖教中から要文を抜き出し、意訳した冊子です。
聖語末の（　）内の文字は聖教の書名を略記したものです。

【ご法座等のご案内】

7月

7・8（日）

■**午前十時**　「正信偈」
お盆法要【梶原佑倖師（北海道）】

■**正午**
医療相談　【佐藤公彦医師】

7・15（日）

■**午前十時**
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生まで）

7・22（日）

■**午後一時**　「歎異抄」
定例法座・祥月命日合同法要
【高田慈昭師】

8月

8・12（日）

■**午前十時**　「正信偈」
お盆法要【梶原佑倖師（北海道）】

8・19（日）

■**午前十時**
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生まで）

8・26（日）

■**午後一時**　「歎異抄」
定例法座・祥月命日合同法要
【高田慈昭師】

編集後記

・六月二十四日（日）アキレス腱を痛められご自宅生活を余儀なくされていた高田慈昭師の法座が四ヶ月振りに行われました。参列者一同お元気なお姿に安堵いたしました。

・六月初旬に練馬区に住んでいる次女に二人目の子供が産まれました。私にとっては四人目の孫です。しばらくの間お寺に同居する事になります。上の子供の幼稚園への送迎が日課になりました。

［孫（生後3日）］

・子供や幼児の成長には毎日驚かされますが、新たな発見もあり楽しく生活しています。夏休みには九州から長女の一家も上京します。何処に連れて行こうか、今からあれやこれやと楽しみながら計画を立てています。

・六月の「なかよしくらぶ」に、ひとり人形芝居の安藤けい一先生をお招きして人形劇を行っていただきました。子供と一緒に父兄も楽しませていただいたひと時でした。

［ひとり人形芝居の様子］